

広場の静寂を破ったのは、怒濤のように押し寄せる軍馬の轟きだった。

「河東路経略安撫使、杜愔將軍は何処か」

先頭の、華々しい甲冑を着込んだ将が呉秉彝か。杜愔はそう思った。

「杜愔將軍でありますか。私は、開封府から派遣された呉秉彝です」

開封府というところに、妙に力が籠っている。そんなことが自慢か。

杜愔は笑いたくなくなった。

「遅れて申しわけありません。早速、賊の討伐に入ります」

呉秉彝は意気込んでいる。將軍に昇って初めての任務だった。しかも、至って楽そうな任務だ。これで、手柄を立てられる。そういう思いが、顔に現れている。

「あの砦にるのが賊ですな。あれで全部ですか。二百ほどしかいないようですが」

こんな賊に何をしているのか。そういう言い方だった。

「戦は終わった」

杜愔が、静かに言った。

「えっ……」

呉秉彝が、何を言っているのか分からないという表情になった。

「戦は終わったのだ。おまえ達の出る幕はない」

杜愔がきっぱりと告げた。横に控えていた陳隆が口を挟んだ。

「將軍、それはどういう意味でしょうか。賊はまだあそこに……」

「あれは賊ではない。賊は、もうとっくに鎮圧した」

「まさか。どう見ても、あれは賊ですよ」

「儂が、賊ではないと言っておるのだ」

呉秉彝が怒声を上げた。

「我々は、わざわざ開封府から来たんだ。何もせずに帰れません。どうしても言い張るのなら、いいでしょう。我々だけで賊を平らげま

す」

短気な男のようだな、と杜愔は思った。

「そうか、それほど戦がしたいか」

杜愔が、囁くように言った。

「何だと、この老いぼれ」

呉秉彝が、怒りの形相を見せた。

「若造、そんなに戦がしたいのならさせてやる。ただし、将同士の一騎討ちだ。いたずらに兵を擧なうわけにはいかん」

杜愔はあくまで冷静だ。

「何でもいい。受けて立ってやる。一騎討ちだろうが何だろうが、要は、賊を平らげればいいんだ」

杜愔に食ってかかろうとする呉秉彝を、副将の陳隆が必死で止めている。

「皆、聞いたな。おまえ達が証人だ。これから五人の将を出し合って、一騎討ちを行う。三人勝った方の勝ちだ。負けた方は、勝った方の言うことを吞まねばならん。それでいいな」

杜愔が、自分の率いる兵達だけでなく、呉秉彝の率いる兵にまで確認した。両方の兵とも、全員が頷いた。開封府の兵達も、わざわざ怪我をしたくはないらしい。特に、後方にいる百人ばかりの兵は、武器や具足を鳴らして囂し立てていた。異質な兵だな。そう、杜愔は感じた。

「宋家党の者達よ。話は聞こえたな。これに応じるかどうか、おまえ達で決めてくれ。ただし、おまえ達から、黒旋風と短梢子の男は、出してはならん。勝負が見えておるのでな」

杜愔が、大声で呼びかけてきた。はっきりとではないが、おおよそのことは聞き取れた。

李逵が口を開いた。

「嬢さん、どうします。儂と公孫勝殿が出られないのは辛い、これは絶好の機会です。まともに、首都禁軍とぶつかるわけにはいきません」

「私もそう思う。もはや、頼れる罨もない」

公孫勝だった。雪華は、静かに二人を見た。

「これは、経略使様がわたし達に与えてくださった機会です。これを活かせと言っておられるのです。わたしは信じます。皆も、そして経略使様も」

雪華は、動じていなかった。

「分かりました。それでは、戦わせる者は、嬢さんが選んでください。儂には荷が重い」

李逵が杜愔に向かって、承諾の意を告げた。杜愔が大きく頷くのが分かった。

広場の中央が空けられた。禁軍兵も後ろに下がり、固唾を呑んで成り行きを見守っていた。

首都禁軍の中から、一騎飛び出して来た。長槍を構えた、大柄な将だった。

「さっさと首を差し出せい。おまえらのような賊など、一合※で串刺しにして見せるわ」

※一合 一回のぶつかり合い。合とは、戦いでぶつかり合いのこと。

将が蛮声を上げた。

「勝負は、半刻※。それで決着がつかねば引き分けとする」

杜愔が静かに宣言した。※半刻 約十五分。

雪華が黄玉を見た。

「本当はわたしが出たいのだけれど、今のわたしでは、皆の足手まといになるだけです」

「姉様……」

黄玉が、形のいい眉を曇らせた。

「黄玉、緒戦はあなたに任せます。存分に戦って、必ず勝ちなさい」

「はい」

黄玉が蒼月を駆った。

「何だ、女だと。きさまら、開封府禁軍を馬鹿にしているのか」  
将が吠えた。

「そうだ、おまえなど五合もかけず倒してみせる」

黄玉が楽しそうに答えた。戦女神の、血が騒いでいるようだった。「ほう。大した別嬪じゃないか。決めたぜ。おまえは、殺さずに捕らえる。楽しみが増えたぜ」

首都禁軍の偏将の一人だろう。黄玉はそう思った。だからといって、甘く見ていいというわけではなかった。金や家柄で昇った將軍などより、たたき上げのこうした将校の方が、遥かに強いとも考えられる。

「おまえに、わたしが捕らえられるかな」

黄玉が、嘲りの笑みを浮かべた。三の木戸から連れられて来た蒼月は、ようやく戦に出られた嬉しさからか、前脚を上げて大きくいなないた。戦場に緊張が走った。禁軍騎兵の馬は、蒼月の雄々しさに怯み、数歩後退するありさまだ。

いきなりの激突だった。蒼月は、肩で偏将の馬にぶつかった。偏将の体勢が崩れる。黄玉の剣が、目にも留まらぬ速さで動いた。偏将が長槍を繰り出した。黄玉の横腹を狙ってだった。長槍が蒼月の手前に落ちた。からんという乾いた音が、広場に響いた。偏将が、何が起きた、という顔をしている。次いで、自らの両手を見た。悲鳴が上がった。偏将の両手首から、大量の血が噴き上げている。両手首は、ちょうど骨のところまで、口の形に切られていた。言葉にならない声を上げて、偏将が馬から転げ落ちた。

「勝負あったな」

杜愔が静かに言った。どことなく満足そうに、見えなくもなかった。

「次」

杜愔の声は、相変わらず穏やかだった。

呉秉彝と陳隆は、顔を見合わせていた。まさか、賊に、それも女に負けるとは。顔にはそう画いてあった。

また、一人の将が出て来た。恰幅のいい、筋肉質の将だった。

「情けない。こんな賊どもに遅れをとるとは。この俺が仇を取ってやる」

将は、そう言って大刀を振り回した。

「聞起、次はあなたです。引き分けでもいい。ですが、負けないように。この将は、手強いようです」

雪華が、少し心配そうに言った。この将に黄玉を当てればよかったか。雪華の脳裏に、そんな思いが浮かんで来た。

「姉ちゃん、確かにこいつは強そうだ。でも、俺には臙月がついてる」  
聞起が胸を張った。

「そうね。臙月ですものね」

聞起が広場に出た。臙月は前脚を搔いていた。

「死ねい、小僧」

将が、大刀を振り上げて突進して来た。馬もかなりいい。聞起はそう見て取った。大刀が振り下ろされた。聞起の姿が消えた。馬が交差した。

「曲乗りしか出来んのか」

将が嘸った。聞起は、臙月の横腹から、背に身体を戻した。

「それだけだと思ukai」

聞起が、両肩に巻いた流星錘を解いた。

「ほう、流星錘か。いいだろう。投げてみよ」

将が馬を駆った。聞起も臙月の横腹を蹴った。

あと三馬身でぶつかるといいう時、聞起の右手が動いた。臙月の勢いにも乗って、錘が将を襲った。がんといい大きな音がして、錘が斜めに方向を逸らしていった。大刀が将の顔を庇っていた。

「ちっ」

聞起が舌打ちした。将がにやりと笑った。

横薙ぎに大刀が襲って来た。からくも、聞起がかわした。二撃目があった。これもかわした。三撃目、斜め下からだった。かわせるか。聞起の心に焦りが生まれた。臙月が前脚を折った。聞起の頭を、唸り上げて大刀がかすめて行った。臙月が、素早く立ち上がって前に逃げた。

「ふう。臙月、おまえのおかげで助かった」

聞起が呟いた。大丈夫だったかともいうように、臙月が首を回し

て聞起を見た。

「ふん。逃げるのだけはうまいようだな」

将が鼻息を荒くした。

「これからだ」

聞起が朧月を駆り立てた。

聞起の頭上を、唸り上げて流星錘が回った。将の周りを駆け回り、大刀の間合いから遠ざかった。朧月が、素晴らしい速さで周回した。

「くそ、間合いが遠い」

将の齒軋りが聞こえるようだった。

突然、錘が飛んできた。からくも、頭を伏せて将がかわした。また来た。兜の房が飛んでいった。将が蒼い顔をしていた。

「ほらほら、さっきの勢いはどこへ行ったんだい」

聞起が挑発した。将の顔色が、蒼から朱に変わった。

「この小僧」

将が駆け寄って来た。聞起が、左右の錘を同時に投げた。左は弾かれたが、右が兜に当たった。将の兜が吹き飛んだ。将は慌てて馬を返した。

「そこまで、時間だ」

杜愔の声が響いた。

将はほっとし、聞起は悔しそうな顔をした。

雪華のもとに戻ると、聞起は申しわけなさそうに言った。

「姉ちゃん、ごめん。倒せなかった」

「十分よ、聞起。よくやったわ」

雪華は、聞起をねぎらった。

呉秉彝が、顔を赤くして陳隆に詰め寄っていた。

「勝てんではないか。どういうことだ、これは。強い偏将はいないのか。これでは、開封府禁軍の名折れだ」

「まあまあ將軍、次はこの軍でも名うての偏将を出します。次を御覧になってください」

陳隆は、そう言って呉秉彝をとりなした。そして、隊のなかほどに

控えていた偏將に合図を送った。

小柄だが、がっしりとした体格の將だった。長槍を構え、静かに広場の中央に馬を進めてきた。

雪華はじつとその將を見つめている。

「嬢さん。こいつは手練れだ。へたしたら危ない」

李達が珍しく心配そうに言った。自分が出られないことに、焦れつつも感じていようだった。

「では、誰を」

雪華が、迷いの色を見せた。

「陳達を。あいつなら、少なくとも死にはせんだろう。黄玉なら勝てるだろうが、一度出てしまったから仕方ない」

李達は平気で陳達を推した。雪華は迷ったが、仕方がないと思い直した。曹瑛は、こういう戦いには向かない。陳統では、死なすようなものだと思えた。

「陳達様、行ってくれますか。お怪我をしておられるのは分かっています」

雪華が遠慮がちに訊いた。

「ああ。ここは俺の出番だろうな」

あっさりと陳達が言った。ただじゃ死なんぞ。陳達は心の中で思った。

陳達が広場の中央に出た。

將は、静かに待っていた。

「さあ、始めようぜ」

陳達の言葉に、將は答えなかった。

「何だよ。ぶっきらぼうな野郎だぜ」

いきなり、將が馬を駆り立てた。息つく暇もなく、長槍が繰り出されて来た。上下左右、長槍は、神出鬼没に陳達を襲って来た。

「うお……」

陳達は、からくもその鋭鋒から逃れていった。

雪華が目を逸らした。公孫勝が出ようとする。李達が口を結んでい

る。

「いい加減にしやがれ」

陳達が、鉄管鎗を一振りした。長槍が弾かれた。短いとはいえ、鉄管鎗は柄も鉄の管で出来ている。木の柄の長槍などは、楽に跳ね返せた。

将の表情が動いた。

「へっ。ようやく調子が出てきたぜ」

陳達が嘯いた。

鉄管鎗が、将を襲った。長槍の柄を巧みに使って、将が鉄管鎗を逸らした。

「これでどうだい」

陳達が左右に鎗を突いた。

長槍と鉄管鎗が、目まぐるしく動き回った。二人とも、全く譲らぬ槍の冴えだった。

陳達が鉄管鎗を振り上げる。

「でえい」

気合と共に、鉄管鎗が振り下ろされる。将が両手で柄を支え、それを受ける。鈍い音がして、将の長槍の柄が折れた。

「もらった」

陳達が馬を駆った。突然、目の前の景色が回った。

「うおう」

陳達の身体は、馬から投げ出されていた。身体を回転させて立ち上がった。馬の左前脚が折れている。近くに、長槍の折れた柄が転がっていた。

「折れた柄を投げたのか」

陳達が呟いた。馬は立とうとしていたが、なかなか身体を持ち上げられない。

「済まん。あとで手当してやるからな」

陳達が馬に言った。脚が折れては戦には出せない。せめて、労役にでも。そう、陳達は思った。



折れた長槍を持って、将が突進して来た。

「俺は跳澗虎、馬がなくても脚があるぜ」

陳達が跳躍した。軽々と馬上に達した。将が驚いて馬から落ちた。

「そこまで。半刻だ」

杜愔が告げた。どこか残念そうな表情だった。二人は、それぞれの陣に帰還した。

「兄貴、済まねえ。結構手強かったぜ」

汗を拭いながら、陳達が李達に詫びた。

「いいや、よくやった。気転のきく、おまえだから負けなかったんだ」

李達は、陳達の健闘を讃えた。

「それにしても……」

李達が呟いた。

「これで、一勝と二つ引き分けだ。三つ勝つまで続くのだから、こちらから出す者がおらん」

雪華も、それが気がかりだった。曹瑛と陳統は出すわけにはいかなかった。曹瑛の弓も、陳統の鉄扇も、一対一の戦いには向かない。

いざとなれば自分が。雪華は、そう覚悟を決めていた。何としても、公孫勝と李達が出られないのが痛かった。この二人なら、どんな猛者が出てきても負ける心配はない。

「宋家党の一勝。あと二つだ」

杜愔が呟いた。隣で、平真が心配そうな顔をしている。

呉秉彝が、偏将を怒鳴り散らしているのが見えた。陳隆が、それを何とか宥めているのも見えた。

「次は……」

雪華は、そこで言葉を切った。誰がいるというの。雪華は悩んだ。「私が」

楊林だった。槍を手にし、ゆっくりと雪華の前に馬を進めて来た。

「あなたは、まだ来たばかりよ。こんな危険な目に遭わせることなど出来ません」

その時、後ろから声がした。

「天魁の星よ。地暗の星に任せよ」

九天玄女の声だった。晁蓋も横に立っている。怪我のために三の木戸に残してきたのだったが、九天玄女と共に降りてきたようだった。

「でも、玄女様……」

「大丈夫だ。たとえ命を落としても、この者は後悔しまい」

「はい。その通りです」

まるで隣の村に遊びにでも行くように、楊林が答えた。

「いいのですか」

雪華が訊いた。

「はい」

楊林は、やはり同じ答えだった。

「姉さん、大丈夫。楊林様の槍は、禁軍に負けないわ」

はじめて曹瑛が口を挟んだ。楊林は、笑顔で曹瑛を見た。

「分かりました」

その言葉が終わらぬうちに、楊林は広場の中央に馬を進めていた。

首都禁軍からも将が出てきた。顔中髭だらけの大男だった。片手で大斧を振り回していた。

「おやおや、今度は優男かい。槍じゃなくて、尻でも貸しな」

将は下卑た笑い声を上げた。楊林の表情は変わらない。

「いくぞ。首を差し出せい」

将が、大斧をかざして楊林に向かって来た。楊林は、槍を構えもしない。目を凝らして、ただ将を見ている。

大斧が、楊林の頭めがけて振り下ろされた。空気が焼ける匂いがした。大斧は地面に激突した。

「ちいっ」

髭面の将が舌打ちした。楊林を捜して顔を振った。だが、楊林の姿を見ることはなかった。

「ふん」

一つの気合で、楊林の槍は将の両目を貫いた。気が滅入るような長い悲鳴を残して、髭面の将は地面に滑り落ちた。馬だけが、主人を忘

れて自陣に駆けて行った。

「宋家党の二勝目」

杜愔が力強く宣言した。

「やったな。すげえぜ」

陳達が、楊林の肩を叩いた。楊林は、相変わらず微笑んでいるだけだった。曹瑛が笑顔で楊林を迎えた。楊林も微笑み返した。それを見て、聞起は心が苛立つのを覚えた。何なんだこの気持ちは。聞起は戸惑った。だが、どうしても心の疼きを抑えきれない。

「やりましたね、楊林殿」

雪華が労った。

「お役に立てて光栄です」

楊林は、何の銜もなくそう答えた。

首都禁軍の陣営は、いよいよ混乱の度を増していた。呉秉彝が、自分が出ると息巻いていた。それを、陳隆が必死に止めているようだった。

「何ということだ。こんな鼠賊に遅れをとるとは」

一人の将が、馬を駆って広場に躍り出た。腕が丸太のように太い巨漢だった。

「おお、あの者なら」

呉秉彝が、満足げに呟いた。

将は戟を手にして、辺りを見回している。広場の中央は、その将に気を呑まれたように静まりかえっている。陳隆も、これなら大丈夫といった顔で頷いていた。

公孫勝が雪華に呟いた。

「私が行くか」

「いけません。せっかく経略使様がくれた機会です。それを裏切ることは出来ません」

「だが……」

公孫勝は、誰も死なせたくなかった。だから、自分が出たかった。この将はかなりの手練れだと感じた。自分か李達、それとも黄玉。こ

の三人しか考えられない。規則を破った罪は、この将を倒した後、自らの命で償う。公孫勝はそう考えていた。自分は、もう十分生きた。この若者達の夢のために死ぬるなら、それはそれでいい人生だと思えた。

「公孫勝様。規則は破れません」

雪華が言った。

「では誰が」

陳統が、俺が行くと騒ぎ出した。晁蓋までも、俺に行かせろと叫んでいる。それを無視して、雪華が口を開いた。

「わたしが出ます」

「駄目よ、姉さん。そんな身体で戦えるわけないわ。代わりにわたしが行く」

曹瑛が水月を駆ろうとした。手には、蒋唐の小刀を握っていた。

「曹瑛、駄目」

雪華が、厳しい声を上げた。

「私達では駄目かな」

後ろから声がした。董超とうしやうだった。

「私と、薛せつ覇ぱ。どちらでもいい。勝つことは無理でも、あの男は、一度戦えばもう出て来られんのだから、次はもつと弱い者が出て来るかもしれない。それを倒せば三勝だ。次に望みをかけるといいうのも悪くはない」

「董超の親父、何言ってるんだ。俺は負けるつもりはないぜ。たとえ敵かきわなくなっても、道連れにはしてやるさ」

薛覇が叫んだ。

雪華は困った顔をした。この将に当たることが出来そうな者は、残っている者の中では思い当たらない。

「天魁の星よ」

九天玄女の声が聞こえた。

「時遷ときせんを使え」

「時遷様を……」

「そうだ。」

「でも、時遷様は、玄女様の……」

「私も、宋家党の一員だと思ってるんですがねえ」

時遷が微笑んだ。

「こういう戦いは得意じゃありませんが、勝たなくても、負けなければいいと言われるのなら」

「でも……」

その時だった。割れるような大声が広場にこだました。

「待て。ちよつと待て」

右の林の中から、雲突くような大男が飛び出して来た。九尺※、いや、それ以上ありそうだった。その男に続いて、わらわらと林の中から男達が飛び出して来る。皆、手には思い思いの武器を持っている。

※九尺 約百九十八センチメートル。

「杜遷様」

曹瑛が声を上げた。楊林も、杜遷を見て破顔した。

「おう、姉ちゃん。無事に戻ったんだな。そこで話は聞いたぜ。何を迷うことがある。俺がやりやいいんだ」

雪華は驚いた顔をしている。

「杜遷……。太原府の俠を締めている、あの模着天か」

李逵が訊いた。

「そういうあんたは黒旋風だな。いや、俺はあんたを尊敬してるぜ」

杜遷はそう言って、李逵に抱拳した。

「嬢さん、天の助けだ。模着天を出そう」

李逵が言った。雪華は杜遷を見つめている。

「曹瑛を助けていただいたそうですね。ありがとうございます。この上、ご迷惑をおかけするわけには……」

雪華の言葉を、九天玄女が遮った。

「この者も星の仲間だ。遠慮はこの者に対して失礼というものだ。天魁の星よ、この者に任せるのだ」

「済まないな、女官さんよ。」

杜遷は九天玄女を、宮廷の女官とでも思ったようだ。

「行け。地妖の星よ」

「何だそりゃ」

杜遷は怪訝そうな顔をした。

「いずれ分かる。今はほれ、あの男を倒すことだ」

九天玄女は、広場で待つ将を指差した。

杜遷が広場に向かった。

「殺されに出て来たか」

将が苦笑した。

杜遷は徒歩で正対した。

「偉そうに馬に乗ってやがるが、半刻もしねえで地べたに這いつくばることになるぜ」

杜遷が言い放った。

「ほざけ」

将が戟を突き出した。

杜遷の棒が、小さく回転した。振り下ろされた戟が、大きく横に弾かれた。間髪を入れず、杜遷の棒が将の顔面を襲った。棒が空を裂いた。

「やるねえ」

杜遷が不敵な笑いを浮かべた。

将の顔が真剣になっていた。本気でかからねば危ない。そう感じたようだった。

将が戟を横薙ぎに払った。杜遷が地に棒を立てて、それを受ける。戟が斜めに襲って来た。棒が、勢いを殺すように戟の柄を押さえる。戟が土を舞い上げた。棒は風圧でそれを散らす。めまぐるしく、棒と戟が交差した。

「なかなかの腕だな」

将がはじめて口を開いた。

「あんたもな」

杜遷が応じた。

組み合った棒と戟が、申し合わせたように退いた。

「次が最後だ」

将が言った。

「俺もな」

杜遷が答えた。

将が馬の横腹を蹴った。

杜遷は動かない。

戟が振り上げられた。棒が水平になった。

ぶつかった。

「おお……」

李逵が呻いた。

空馬が禁軍の方に駆けて行った。将は、仰向けに地に横たわっていた。

「一丁上がりつてとこだ」

杜遷が嘯いた。

将の顔面が潰れている。杜遷の棒の先が、禍々しく朱に染まっていた。

「地妖の星か……」

李逵が呟いた。確かに、妖しいほどの棒術かもしれん。李逵は、妙に納得したような表情をした。

「宋家党の三勝。勝負は決まった」

杜愔が高らかに宣言した。東汾山勢から歓声が上がった。太原府禁軍からも歓声が上がった。開封府禁軍だけが、水を打ったように静まりかえっている。

「経略使様、これで宋家党は助かりますね」

平真が破顔した。

「何を言っておる。これからが儂らの勝負だ」

杜愔がたしなめた。

「どういうことですか」

平真の問いに、杜愔は答えなかった。

「興仁貴」

杜愔は、興仁貴を呼び寄せた。

「これから太原府禁軍は、おまえの指揮下に入る」

杜愔は、兵達に聞こえるように言った。

「どういう意味ですか」

興仁貴は、戸惑った表情をした。

「言った通りの意味だ」

杜愔が答えた。

「意味が分かりません」

興仁貴は、食い下がった。胸に、不吉な思いが込み上げている。

「今日をもって、儂は職を辞す」

杜愔が言った。興仁貴が絶句した。平真も驚いている。

「それより、儂が困めと言ったら、直ちに開封府禁軍を包み込め」

杜愔が命じた。これが最後の命令だ。そんな目をしている。

「は……はい」

杜愔の気持ちがかかった。興仁貴はそう感じた。

「平真、おまえは儂と来い」

杜愔の言葉に、平真は黙って頷いた。

二人は、ゆっくりと開封府禁軍に向かった。

「呉將軍、勝負あったな」

杜愔が静かに言った。嘸りも、自慢も見られない。

「くっ……」

呉秉彝は、顔を赤くしていた。今にも血の管が切れそうな様子だ。

「約束通り、退いてもらいたい。この戦は終わった。我々の負け、そ

ういうことだ」

「ふざけるな」

呉秉彝が怒鳴り声を上げた。

「こんな茶番、誰が認めるといふのだ。俺は認めん。こんなことで、

俺の軍歴が傷付いてたまるか」

呉秉彝は、半ば錯乱状態だった。



「認めんとどうなるのだ」

杜愔が大刀を構えた。陳隆が、慌てて割って入った。

「経略使様、將軍は気が立っておられるだけです。失礼の段、どうか御容赦を」

陳隆は、必死の形相だった。

「いらぬ世話だ。この老いぼれに、禁軍の誇りを教えてやるんだ」

太原府禁軍の兵士達が、一斉に怒りの目を向けた。杜愔を慕っている者ばかりだ。河東路に杜愔あり。兵達の誰もが、それを誇りにしている。その杜愔が侮辱されたのだった。

「興仁貴。囲め」

「はっ」

興仁貴も、怒りを露わにしていた。

「平真、おまえは副将を」

「承うけつりました」

反対側では、侠と思われる者達が、じりじりと開封府禁軍に圧力をかけている。およそ五百。平真は、そう見て取った。

「この老いぼれが」

呉秉彝は、もはや正常な思考を持ち得なかった。

杜愔に向かって槍を繰り出した。杜愔がそれをかわした。年齢を感じさせぬ身ごなしだった。平真が、助けようとする陳隆を阻はんだ。

呉秉彝が、闇雲やみぐもに槍を突き出した。ことごとく、杜愔がかわした。

大刀が動いた。横薙ぎに、しかも凄まじい速さだった。

首のない呉秉彝の身体が、崩れるように馬から落ちた。首は、どこに飛んだか分からなかった。

平真が一刀のもとに陳隆を斬り伏せて、杜愔に馬を寄せた。

「経略使様、お怪我は」

「ない。こんななまぐらの槍など、かすりもしないわ」

杜愔は、息も上がっていない。

「平真。おまえは、宋雪華と共に歩め。おまえの道は、禁軍にはない。これが首都禁軍の一端だ。もちろん、こんな手合いだけではないがな。

儂は、長年この国の軍にいて、ついに生きがいというものを見つけれなかった。あの西夏との戦いを除いてな」

杜愔の目は、成長した息子を喜ぶようだった。平真は言葉が出なかった。

「おまえに、新しい名をやろう」

「えっ。」

「新しい人生を歩むのだ、新しい名こそふさわしい」

「はい。」

平真は、不思議と素直に返事をしていった。もう一人の父。そう思い続けてきた。その父から、新たな名をもらおう。清新な風が、心の中を吹き抜けて行くようだった。

「彭玘。どうだ、これで」

杜愔が、感慨深げに言った。

「前に話したな。儂の心の友。あの西夏の將軍の名だ」

「そんな方の名を」

「おまえにはよく似合う。そしておまえは、その名を持つにふさわしい。綽名は天目将。武神の名だ」

「天目将彭玘……これが私の名……」

平真は、その名に誇りを感じた。天目将彭玘。私はこの名で生き直そう。平真の心は、喜びで震えていた。

「ありがとうございます。経略使様」

彭玘は杜愔に感謝した。

「うむ。彭玘、もう仲間のもとに行け。宋雪華、あれは素晴らしい娘だ。まさに、天に愛でられた娘」

杜愔は満足そうに言った。

「だがな、腐っているとはいえ、この国はまだまだ強大だ。宋雪華の歩む道は、茨の道だろう。彭玘、おまえはそれを援けるのだ。あの娘の夢が叶うようにな」

「この名にかけて」

彭玘が誓った。杜愔は優しい目で見つめている。

「一つ、言っておくことがある。儂には、たった一人だけだが弟子がおった。その者に会うことがあったら、儂の言葉を伝えてくれ。おまえの夢と、同じ夢を抱いている娘がいるとな。そして、宋雪華を会わせてやってくれ。きつと、同じ道を歩むことになるだろう」

彭玘は驚いた。杜愔は、弟子を持たないことで知られていた。その大刀の腕を慕って、多くの武人が杜愔に教えを請いに来た。だが、彭玘の知る限り、ただの一人も弟子にしてはいなかった。彭玘自信、杜愔から大刀を教わったことはない。

「経略使様に弟子が……」

「そうだ。弟子といってもな、あ奴の方が遥かに強い。今は、四旬※ほどになるはずだ。会わなくなつて、もう十歳以上になるかな」

「居所は。」

「そうだな。おそらく、唐州※の辺りにおるはずだ。」

唐州。彭玘は思った。西京河南府※を真ん中とすると、ちょうど太原府から南に二倍の位置にある。けして遠いとは言えなかった。

※四旬 四十歳。

※西京河南府 唐の時代の洛陽。

※唐州 京西南路の州。

「その方の名は」

「関勝。大刀と呼ばれておる。立てば、蓋世の英雄たることは間違いない」

「そこまでの方ですか」

「そうだ」

杜愔が断言した。

「さあ、もう行くがいい。おまえの活躍を期待しておるぞ」

杜愔は満面に笑みを浮かべた。

「経略使様。いえ、父上……」

だが杜愔は、馬を開封府禁軍に向けていた。

それ以上言葉を口に出来ず、彭玘は一の木戸に馬を走らせた。一の木戸では、雪華をはじめ全員が笑顔で待っていた。私は宋家党の一員

だ。彭玘は心の中で叫び声を上げた。

杜愔は、開封府禁軍の前に出た。

「おまえ達に告ぐ。これ以上の血は流したくない。速やかに兵を引いて、開封府に戻るのだ」

杜愔の声が広場に響き渡る。誰も答えない。

「五人の将校の中で、おまえが一等まともであつた」

杜愔が、陳達と戦つた将を指差した。その将は、ときまぎして杜愔に札を執つた。貫禄の違いだ。

「おまえに、これをやる。開封府に戻つたら、童貫に見せるのだ。それで、おまえ達の罪は問われん」

「童元帥に……」

「そうだ。この度のことはすべて、この杜愔の叛逆のせいだと伝えよ」

開封府禁軍の周囲は、興仁貴の率いる太原府禁軍と、杜遷の集めた狭で囲まれている。太原府禁軍は、殺意を露わにしている。開封府禁軍は、首を縮めて小さくなつていた。

杜愔が大刀を首に当てた。

「さらばだ、彭玘。託したぞ、関勝」

杜愔が大刀を引いた。

「経略使様」

彭玘と興仁貴が、同時に叫んだ。

杜愔の大刀が落ちた。大きな音が広場にこだました。杜愔は馬から落ちなかった。首を失つても、なお杜愔の身体は馬上にあつた。

.....

龜伏山の攻防が終決し、数日が経っていた。開封府の東南、禹廟の中で、二人の男が話し合っている。一人は、山のような大男。もう一人は背こそ低いが、岩のようにがっしりとした体格をしていた。大男の頭は、見事に剃り上げられていた。

「元締め、総て終わったそうです」

燕順つばきじゆんが言った。

「そうか。で、杜遷とせんは」

大男が訊いた。

「首都禁軍の将校を一人、殺ころったようです」

燕順が淡々と答えた。

「杜遷とせんを出さねばならんな」

「はい。太原府を抜ける準備は、既に手配してあります」

「どこにやるかだな」

大男が腕を組んだ。ついでに、禿はげた頭をひと撫なでした。

「元締めは、どこへと」

燕順は、元締めが決めてくれと言わんばかりだった。

「杜遷とせんな……。そうだ、父親のところでは駄目か」

大男は、いい案だと言うように手を打ち鳴らした。

「杜遷とせんに父親はいません」

燕順が、冷静に答えた。

「おい、燕順。儂わがにだって、目もあるし耳もある。おまえが、儂わがを煩わづわせたたくない気持ちは嬉しいが、儂わがは知っておるのだ」

燕順が苦笑した。

「失礼しました。では、杜遷とせんは杜興とけいのもとに」

「鬼臉きせん児こ杜興とけいか。大した男だったな。儂わがも、久しぶりに会いたくなつたわい」※鬼臉きせん児こ 鬼おにのような怖い顔かほの男。

「杜興とけいは、杜遷とせんに居場所を隠していました。こちらで、案内させましようか」

「なに、居場所を教えるだけでいい」

「分かりました」

「それにしても、燕順」

「はあ」

「宋雪華そうせつか。早く会いたいものだ」

「そうですか」

「何だその、気のない返事は。おまえが、亀伏山かめふしに向かおうとしてい

たのは知っておるぞ。助けに行こうとおったな」

燕順が、急にあたふたしだした。

「それは……元締め」

「まあいい。儂も行きかけたからな」

「元締めもですか」

「あたりまえだ。宋雪華が、禁軍に向かって語ったこと。儂は、報告した者に詳しく訊いた。まさに、侠の心ではないか。儂ら侠は、その心を失くしかけておるがな」

「確かに」

燕順も同意した。

「なあ、燕順。何だか、生きていてよかった。そう感じるな。宋家党か、これからが楽しみだ」

「元締め。まだ、表立っては助力しないのですか」

燕順が、真剣な目で訊いた。

「まだ早い。そのうち、嫌でも聞らねばならぬ時が来るだろう。それまで、陰ながらの助力でいい」

「分かりました」

燕順は、明らかに落胆した表情を見せた。

「だがな。おまえが勝手にすることを、儂は咎めるつもりはないぞ」

燕順の顔に光が戻った。

「はい」

燕順は深々と大男に礼を執った。

・・・

宰相府の北東の堂に、幽かな灯りがともされていた。深夜、そう言ってもいい時刻だった。

「黒死軍もかたなしじゃない。なめられたものね」

女の声だった。ぞっとするほどの妖艶さだ。ほの暗い堂の中ではよく分からないが、その声からすると、容姿もそうだろうと思われた。

「蝙蝠が敗れるとはな……」

男の声だった。低いが、僅かにかすれた声だ。

「あいつはね、腕は立つたかもしれないけどね、結局ここが弱いのだ。女はそう言つて、自分の頭を指差した。」

「殺ったのは女らしい。柴進と名乗ったそうだが、宋家党の黄玉なことは間違いない。剣の天才と言われている」

「女でも強い者はいるさ」

「おまえもそうだからな、孔雀」

孔雀と呼ばれた女は、男を一瞥しただけだった。

「あたしに喧嘩を売ってるのかい」

「まさか。おまえは、俺が最も頼りにしている隊長だ。だから、一番隊を預けている」

「王倫、あんたいつから口がうまくなったんだい」

孔雀が揶揄した。

「おまえの前ではな」

王倫と呼ばれた男が、にやりと笑った。

「それにしても、蝙蝠一人じゃなかつたんだろう」

「百人以上向かつたらしい」

「情けないね。それだけ行つて、小娘の首一つ取れなかつたのかい」

「蝙蝠の部隊は、諜報に長けた者は多いが戦闘には向かない。隊長の力に依存しすぎていたということだな」

王倫が苦々しそうに言った。

「童貫も大恥だねえ。開封府禁軍まで出して、何も出来ずに追い返されたつていうじゃないか。あの腐れ者、さぞかし怒りまくつてることだろうね」

「ああ、大変な剣幕らしいな。将校が持ってきた経略使の首を、蹴鞠のように蹴飛ばしたらしい。童貫はしつこいからな。しばらくは、將軍どもも生きた心地がしないだろうな」

「いい菓さ。今の禁軍なんて、張子の虎じゃないか。高休の部隊なんか、一刻も駆けられないらしいから」

「あいつ等が弱い方が、俺達の仕事があつていいとも言えるがな」

王倫が、薄ら笑いを浮かべた。

「あたし達も、一応は禁軍だよ。童貫指揮下のね」

「気にしたことはないけどな」

「とにかく、宋家党っていうのは面白そう。その娘、柴進とかいうの、それはあたしがもうわ」

「絶世の美女らしいぜ。孔雀、おまえより綺麗かもな」

王倫の言葉に、孔雀は目に炎を浮かべた。

「あたしよりだつて。王倫、気を付けてものを言いな。あんたを頭領にしてやったのは、あたしと猿王だよ」

「それは分かつてる。それに、俺はおまえ以上の女を見たこともない。柴進っていうのも、言われるほどではないと思う」

「まあ、いいさ。あたしがその娘を殺れば、それで終わりなんだから。

誰か追つてるのかい」

「野鼠のねが追っているらしい」

「野鼠かい……。あたしが殺りたいんだけどね」

「いいのか。蔡京はどうする。おまえに溺おぼれているぞ。蔡京の籠絡かごらくと護衛がおまえの仕事のはずだ。それに、一番隊は開封府の諜報も担にっているではないか」

孔雀は、少しの間考え込んでいた。

「野鼠には無理だね」

ぼつりと、そう言った。

「蝙蝠が拾って、仕込んだ男だ。そこそこはやると思うが」

王倫も、さほど期待してはいないようだった。

「あたしの出番も残されているようだね。いいさ、とりあえずは黙って見ていようじゃないか」

「それが一番だと、俺も思う。だが、孔雀。面白くなってきたな」

王倫は、嬉しくてたまらないといった声だった。

「あたしは、あんたのような変態じゃないよ」

「何とでも言え。俺はな、楽しいことを探してたのさ。これまでのよ



うなつまらん仕事じゃなくな。こう、肌がひりつくような仕事さ。この仕事は、何だかそんな匂いがする」

王倫は、暗い喜びを感じているようだった。もつともつと、宋家党よ大きくなれ。そして希望を持って。その絶頂の時にぶち壊す。王倫の心の中に、妖しい灯が燃え始めていた。

・・・

女真族の幕舎は、宋に比べると簡素とも言えた。歩兵を中心とした宋軍は、どうしても滞陣することが多くなる。それに対し、機動力が勝負の北方騎馬民族にとつて、幕舎ですら移動の妨げと言えなくもなかった。阿骨打は今、代州近くの幕舎にいた。兵は二千。遼には、雁門関の遊撃隊と伝えていた。

陽が西の大地に沈みかけ、空は、幻想的とも言える茜色に染まっている。阿骨打は、こんな夕暮れが好きだった。一日の務めを終え、ゆったりとした心持ちで夕陽を眺める。つかの間の、心静まる時間だった。

幕舎の外で声がした。

「入れ」

阿骨打は、心地よい時間から現実の時間に戻った。

「希尹です」

小さいが、よく通る声だった。

男が入って来た。騎馬民族とは思えぬほど、洗練された身ごなしだった。

「希尹か。おまえが来たということは、長兄は死んだか」

阿骨打はどこか投げやりだった。希尹と呼ばれた男は、阿骨打のそんな態度にも、少しも動じたようではない。

「烏雅束様は、四日前にお亡くなりになりました」

「そうか。熟女真のような考えを持ってはいたが、儂は兄者を嫌いではなかった。呉乞買とは仲が悪かったがな」

「烏雅束様も、そう思っておられました」

「どんな病だったのだ」

「少しずつ食欲がなくなられて、最後は水さえも」

「胃の病だったのかな」

「医師も、**証者**も、原因が分からぬと」

※証者 祈禱で占いをたてたり、病を追い払おうことを職とする者。

「そうだろうな。気の病だったのかもしれない」

「その可能性はあるかと」

阿骨打は、そこで大きな溜息をついた。

「それで、族長の件は」

「あちらでは、阿骨打様一色でございます。ただ、周辺の部族の中には、いまだ異を唱えている者もおります」

「まあいい、そ奴らはいずれ討てばいいだろう。とりあえず、生女真を一つにせねばな」

「烏雅束様がおられないので、そう難しいことではないかと」

希尹の目が光った。それを待ち望んでいた。そういうようにも見えた。

「兄者に長くついていたのだろう。哀しくはないのか」

阿骨打が、幾分責めるような口調で言った。

「私の望みはお分かりでしょう」

「文字を作ることだったな。それも、女真の」

「そうです。そして、文字を作るということは、国を創るということでもあります。文字は文化を生み、そして育てます。宋の文字、契丹の文字ではなく、女真固有の文字。この文字が完成する頃には、阿骨打様は女真の国をうち立てている。それが、私の夢です」

「文字の力は、儂も認めておる。国なくして文字は生じ難い。文字なくして文化は成りづらい。おまえが女真の文字を制定してくれるのは、儂にとってもありがたい」

「阿骨打様は、本気でそう思ってくださいます。ですから、私も阿骨打様に賭けたのです」

希尹はそう言って、不気味な笑いを浮かべた。

「まさか、希尹。おまえが兄者を……」

阿骨打は、不吉な考えを頭に浮かべた。

希尹は答えなかった。静かに阿骨打を見詰めながら、ただ微笑んでいるだけだった。

幕舎の外で声がした。

「兄者、呉乞買だ」

「入れ」

呉乞買が入って来た。満面に笑みを浮かべている。

「兄者、宋雪華が助かった。太原府に出していた兵が戻ってきて、朗報を伝えてくれた」

呉乞買は、心の底から喜んでるようだった。

「そうか、それはよかった」

阿骨打もほっとした。自分のせいで。常にその思いがあった。命だけ。そうも願っていた。

「よかった。これで儂も、少しだけ肩の荷が降りた」

阿骨打も満足そうだった。

「兄者。これで私も、本腰を入れて戦える」

「何だ、宋雪華が助からなければ戦えなかったのか」

「そういうわけではないが、心の張りが違う」

「そういうことか」

二人は大笑いした。そこではじめて、呉乞買は、先客がいるのに気付いた。

「おお、完顔希尹殿ではないか。長兄の具合はどうだ。よくないとは聞いているが」

希尹は、困ったような顔で阿骨打を見た。

「呉乞買」

阿骨打が沈痛な顔で言った。

「何だ、兄者」

「長兄は、死んだ」

呉乞買が息を呑んだ。

「四日前だ。希尹は、それを報せに来た」

「そうだったのか」

さきほどの喜びが、一気に吹き飛んでいた。

「仕方がない。病には勝てぬ」

阿骨打の言葉に、呉乞買も頷いた。

「私はこれで」

希尹が、気をきかせたのか、阿骨打に暇を告げた。

「うむ。身体を休ませるがいい」

阿骨打が労いの言葉をかけた。

希尹が出ていくと、呉乞買は阿骨打に詰め寄った。

「兄者、いよいよだな。長兄が死ぬれば、兄者が真の族長だ。これまで、確かに族長とは呼ばれていたが、これで、名実ともに兄者が族長だ」

呉乞買は興奮しているようだった。

「呉乞買、長兄が逝ったばかりだぞ」

阿骨打がたしなめた。

「だがこれは、千載一遇の機会だ。天が兄者に命じたのだ」

阿骨打は複雑な想いに駆られた。天の命などではない。おそらく、希尹が長い時間をかけて毒を盛り続けたのだろう。医師にも分からぬように、少量ずつを。烏雅束の信任篤い、希尹だからこそ出来たことなのだろう。阿骨打は、もう引き返せない修羅の道を思った。

「呉乞買、一つ命令がある」

阿骨打は、心を鬼にしようと思った。

「何だ、兄者」

「長兄の妻子。おまえの家族にするのだ」

言った阿骨打の顔も辛そうだった。

「何だって……」

呉乞買は、呆然と阿骨打を見つめた。

「おまえは、まだ家族を持っていない。おまえにしか頼めないのだ」  
北方騎馬民族には、確かにそうした風習はあった。だが、自分のこ

ととなると、そう簡単に決められるものではなかった。

「私は、義姉さんのことをほとんど知らない。それに……私は……妻とするなら……」

「分かっておる。宋雪華だろう」

「分かっていて、どうして……」

「おまえの気持ちに分からぬでもない。だがな、儂はまだ熟女真の動揺を誘いたくないのだ。長兄は熟女真に近かった。遼に心を寄せ、遼風の生活を送っておった。儂やおまえは、そういう兄者の生き方に疑問を持っておったが、熟女真にとっては、長兄が族長であったことに安心感をいだいておったのだ。熟女真は遼の戸籍に入っておる。女真族というよりは、契丹族と思っただ方がよい。だから、長兄の家族をおまえが引き取る必要があるのだ。儂の後は呉乞買、おまえなのだからな」

阿骨打の説得に、呉乞買は答えなかった。頭の中には、宋雪華の面影があった。呉乞買に向けて、微笑んでいる宋雪華がいた。雪華。呉乞買は、心の中でその名を呼んだ。

「私は……私は……どうすれば……」

呉乞買の声は苦渋に満ちていた。

「呉乞買、おまえ、それほどまでに……」

阿骨打も言葉を継げなかった。

呉乞買は幕舎を飛び出した。泣いてはならぬ。そう、自分に言い聞かせた。

乾いた大地に、今まさに陽が没しようとしていた。空は、群青色が茜色を駆逐しようとしている。微かに砂の混じった風が、黒ずんだ大地を吹き抜けて行った。

「雪華」

呉乞買は、力の限り愛しい女の名を呼んだ。暮れ色の大地が霞んでいる。呉乞買は、はじめて自分が泣いているのを知った。

蠢動

了